

加藤 重樹 京大教授追悼

1976年 京都大学工学研究科博士課程修了、日本学術振興会奨励研究員、1977年 分子科学研究所理論研究系助手、1984年 名古屋大学教養部助手、講師を経て、1986年 東京大学教養学部助教授、1990年 京都大学理学部化学科教授。1992年 日本IBM科学賞受賞。1999年 京都大学評議員、2001年、2007年 理学研究科長・理学部長（各2年）。1997年 分子科学研究所運営協議会委員及び人事選考部会委員（4年）、2009年 分子科学研究所長選考委員会委員、2010年3月31日逝去、享年61歳



森田明弘（東北大 教授）

このたび加藤先生の訃報に接して、加藤先生の薫陶を受けた者として大きな驚きと悲しみを禁じえません。一昨年に手術をされてからは療養中でしたが、今年の初めにお会いした頃には、まだ元気に大学に出てきておられていました。

私事ながら私が修士の学生だったときに理論化学を志望して、1980年代の末にまだ東大の教養学部におられた加藤先生を初めて訪れたときのことを懐かしく思い出します。加藤先生は、ご自身の研究をふまえて化学反応を分子の電子状態から正確に捉える立場を力説され、化学を捉える見方として若い私の心に鮮やかなイメージを植え付けられました。実際、加藤先生の研究は国際的にみても時代を先駆けていたと言ってよく、化学反応の複雑さゆえに多くの曖昧さを含んだモデル的な議論を、電子状態と原子核の動力学的リアルな描像によって塗り替えていくような研究は、非常に魅力的に感じました。

その後加藤先生が京都大学に移られたときに、博士課程の第1期生として研究グループに加えていただき、引き続き助手として加藤先生の身近に接する機会をいただきました。学生時代に加藤先生との議論の一挙一動から、あらゆる面で何かを学びとろうとして毎日を送ったことは懐かしい思い出です。

京大では後進の育成に力をそそがれ、数多くの学生を輩出されました。加藤先生の研究は化学反応を基礎から捉えるがゆえに応用範囲が広く、気相の化学反応から溶液内、さらには生体内の反応まで研究を展開されました。根本には化学反応に関わる電子状態を見抜くという立場で一貫しており、その教えを受けた学生はいろいろな分野で活動しています。加藤先生の成し遂げられたご研究は、分子の電子状態とダイナミクスを通して化学を理解するという意味で、理論化学のあり方の一つの典型を築くものだったと思います。

京大では途中より理学研究科長を2度も務めるなど大学の運営に大きな責任を担うようになり、大学の大きな変動期に理学の立場を貫くことに全力をそそがれました。この時期大変な苦労もおありだったことと思いますが、学生運動の頃から培われたと思われるような、勇気をもって正論を貫き議論をリードするという姿勢は理学研究科の運営にとっても貴重な存在でした。

加藤先生が亡くなられた後、先日小杉先生夫妻とご自宅にお伺いして、お線香を差し上げました。映画がお好きで引退後は映画の本を書きたいと言っておられたこと、ご自分の育てた学生たちをいつも気にかけておられたこと、晩年は身体の不調をかえりみず激務をこなしておられたことなど、数々の加藤先生の思い出を奥さんとお話ししました。早すぎる逝去が大変に惜しまれ、ご自身でも志半ばにして亡くなられたと思いますが、今後残された我々としては加藤先生のご遺志を継いで、分子科学の発展に貢献してゆきたいと思っております。

小杉 信博（分子研 教授）

私が漠然と大学人を目指しはじめた卒業研究のとき、福井謙一研究室でD3だった加藤さんと同室になった。それはちょうど分子研が発足した年のことで、以来、三十五年間、大学人としての加藤さんのものの考え方に私は強く影響を受けている。

卒業研究のあと、私はオーバードクターが大問題になっていた京大を離れ、東大に移った。しばらくして、当時、理研におられた岩田さんに連れられ、たびたび分子研を訪れるようになった。当初は研究棟も計算センターもなく、実験棟は北半分だけで、そこで加藤さんと再会した。「助手になって首が繋がったよ」と加藤さんはたいそううれしそうだった。私の顔を見つけると、同僚と行きつけの喫茶店によく誘って下さった。当時の分子研の助手は、ひとりひとりが研究上も独り立ちしていて、あこがれの存在だった。その後、加藤さんと飲むコーヒーはビールに変わり、「また、おいで。飲みに行こうよ」という決まり文句とともに、渋谷や百万遍などで何度も浴びるように飲むことになる。

東大教養学部時代の加藤さんには、結婚の仲人役をご夫婦で引き受けていただいたり、駒場への異動の誘いがあったり、いろいろお世話になった。そうこうしているうちに、私は京大工学部に理論家として戻ることになった。この話に加藤さんはいい顔をされなかった。しかし、「今の計算機で無理だからと姑息な近似法をあれこれ考えるのはよした方がいい。近似に依らない正攻法のみが後世まで残る」との助言を下された。加藤さんが心配されたとおり、私は胃潰瘍を患う事態にまでなったが、幸い翌年、理学部教授として京大に着任された加藤さんと飲むビールで気分が晴れたのか、潰瘍は癒された。その二年後、今度は実験家として分子研への異動が決まった。加藤さんは「理論だけの世界は化学にはありえない。化学は本来、実験の学問である」、「分子研は長くいるところではなく、いずれは大学に戻って若い世代のために教育に力を入れるべき」との助言を下された。

加藤さんは「分子研には人を採ってもらっているので不義理なことできない」と、分子研運営に関わる重要な役目を務めて下さった。京大で多忙を極めていた中でも「分子研は大丈夫？」と心配の電話が掛かってきたりした。分子研での会議から抜け出して、コーヒーついでにUVSORまで私に会いに来られたこともあった。また、去年は所長選考でお世話になった。

病魔に襲われてからも京都で夕食をご一緒する機会が何度かあった。昨年十一月までは治療時の苦しさを口に出されることもなく、いつもの飾らない加藤さんだった。今年になって再入院されたと聞き、四月一日にお見舞いする予定だった。まさか、その前日に、大峯先生から「明日のお見舞いは叶わぬ……今、目の前で息を引き取られた……」との連絡が入るとは……。私に大学人としての刷り込みをして下さった加藤さんから、もう教えをうけることができない。このむなしさ、この寂しさを紛らわす手立てはないが、これからも私は大学人加藤さんの生き方を追い求めることになる。

平田 文男 (分子研 教授)

加藤さんと出会ったのは、私が米国から帰国し、京都大学に赴任して約1年後のことであった。私と加藤さんの最初の接点はRISM-SCF理論なので、その誕生の経緯から述べよう。

加藤さんが京都大学に赴任された直後だったと記憶しているが、私はあるきっかけで当時コーネル大学の教授だったAtsuo Kukiと親しく議論をする機会を得た。その議論の中で、ミネソタ大学のDon Truhlarのグループが開発した電子状態計算に溶媒効果を取り入れる経験的方法(Generalized Born (GB))に話題が及んだ。その論文の式を眺めたとき、「これならRISMの方がもっといいことができる」と直感した。私はTruhlar達を書き下したフォック演算子の溶媒効果に関わる項をGBではなくRISM理論で与えることを思いつき、当時、郷研の大学院生だった天能君にそのアイデアを話し、学位論文のテーマとして提案した。同時に、加藤さんにも共同研究に加わっていただくよう声をかけた。加藤さんは当時すでに化学反応ダイナミクスに関する独自の理論をうちたてており、理論的見識の深さと広さでは国際的にも屈指の研究者であった。同時に、「化学反応」に対する溶媒効果の重要性を早くから理解している数少ない理論家の一人だったからである。RISM-SCF理論は、その後、溶液内化学反応理論として大きな展開を遂げ、国際的に大きな評価を得た。特に、加藤さんが当時大学院生だった佐藤君を指導して行なった「変分原理に基づくRISM-SCF方程式の導出」は、それまで半ば「直感的」に導いた方程式に盤石の理論的土台を与えたことで、理論化学の歴史に深く刻まれる成果となった。

私は個人的にも加藤さんに「足を向けては寝れない」恩を受けた。京都大学において「研究者生命を断たれる」危機に陥ったことがある。私は研究室の「転属願い」を教室主任に申し出た。この時、「受け入れ」先となって下さったのが加藤さんである。私の一件に限らず、加藤さんは常に若い人や弱い立場にいる人の味方であった。京大化学教室でも、そのことで何かにつけて年配の教授と対立する場面が多かったが、一度として加藤さんを批判する声を聞いたことがない。それは加藤さんが大学の運営においても、また、様々な社会的活動の面でも一貫してその姿勢を貫いていたからだろう。加藤さんのご冥福を心からお祈りします。

大峯 巖 (分子研 所長)

1970年代ベトナム戦争の後の癒えないアメリカを後に日本に帰ってきた。新しくできたばかりの分子研実験棟の5階端の部屋で諸熊先生に会った。その時、部屋の奥のタバコの煙の後ろに加藤君がいた。それが加藤君との出会いである。

我々の世代は、常に「権力」というか、自分を抑えてくるものに反発して生きてきた。そして、貧しくどうなるかわからない不安な中でも、自分のサイエンスに限りない誇りをもっていった。皆、自分達のサイエンスを作るのに一所懸命であった。その頃、加藤君は反応に伴うボブスレー効果(IRC上の振動励起)に関する精緻な、美しい、エレガントな論文を書いていた。

分子研の坂を下った近くの喫茶店、また駅前、西の道路沿いの喫茶店、その三軒に高塚君と三人で入り浸っていた。加藤君がハイライトをふかしながら、阿知波さんも常連で、皆で化学を語り、化学の体制、教授連の批判をしていた。加藤君がグリーンピースがきらいなのを知ったのもその時で、グリーンピース入りのご飯から、グリーンピースを一個一個箸でつまんで除いていたのを思い出す。

研究は夜中まで続き、よく一緒に、午前1~2時に分子研の裏から山手スタジオを通り、科学やよもやまの話をしながら坂道を下り、竜美の宿舎へ帰った。ある時、加藤君がタバコをふかしながら草履サンダルで歩いていると、パトロールカーで巡回中の警官が怪しいと思ったのか「何をしているのか」という職務質問をした。彼はその警官に量子力学の講義をし、無事解放された。其の好きなタバコも、長男の茂君が亡くなってから、ぴったりと止めた。彼のよく着ていたよれよれのレインコート、刑事コロンボのテレビ番組を見ると彼の姿を思い出す。そして茶色のセーター、それを30年以上着ていたようだ。葬式の時の写真にそのセーターをきている学部長時代の加藤君が写っていた。

彼はいわゆる「横飯」がきらいである。例えば、ハワイ島の学会で、迫力のあるフラダンスをしている舞台上に背を向けて外人達をさげ、日本人のいるこちらばかりに話をしていた。それでもマーシャルニュートン、ピーマンバッチなど、外国の友人たちを何度か京都に招待していた。

加藤君は虚飾と流行をきらった。科学研究費でも基盤研究B以上の大きな金額を申請しなかった。そのような彼は、2001年から2年間、また法人化後の2007年から2年間の2回、理学部長(研究科長)に選ばれた。京都大学の学部長会議、評議会などで、一人になっても筋を通していく、学問の「脊椎」のような存在であった。「学問の姿」のために最後まで戦う奮闘ぶりは、名古屋大学にも聞こえてきた。

このような強さと同時に、加藤君は限りない優しさをもっていた。それは、人当たりの良い優しさではなく、厳しくも、本当にその人のためになる考慮をする。それを表ではなく陰で心配する。だから相手は気がつきにくかったかも知れない。このような彼の「厳しさをもった優しさ」は、彼が学問にたいする深い愛情と同時に、本当の学問をすることの難しさがわかる人だったからだと思う。彼は亡くなる直前まで学問をし続けた、そして学問を始めようとする若者を慈しんだ。

加藤君とは、分子研で初めて会ってから三十三年の長いつきあいである、言葉を交わさなくても、互いに何を思っているか分かった。難しい問題がおきると、まず行くのは彼の所である。会っても「どう」「うーんー」で、特に言葉を交わす訳ではない。それでも何か大切なものを共有してきた。亡くなる前の日、無言で彼のベッドの横に座り、二人で過ごした。四半時ではあったが何か永遠の時が流れている気がした。

多くの友が亡くなった。一人一人が掛け替えの無い友である。若い時には、亡くなった友がとても遠いところにいつてしまった感があった。しかし、今、年を重ねてくると、彼らがそんな遠くにいった気がしない。何か、彼らのいる彼岸と我々の生きている空間とが連続的につながっていて、この瞬間にも皆一緒にいる気がする。

それでも、あの電話越しの「加藤です」という声——無性に聞きたい。